



Title	長谷田泰一郎先生を偲ぶ
Author(s)	天谷, 喜一
Citation	大阪大学低温センターだより. 2017, 167, p. 31-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/62113
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

長谷田泰一郎先生を偲ぶ

天谷 喜一

大阪大学低温センターだより初代編集長の長谷田先生が2016年8月15日、京都東山の介護ホームで亡くなりました。享年94歳。奇しくも五山の送り火の前日でした。

ここでは、先生のご薫陶を誰よりも永く受けた弟子として、在りし日の先生を皆さんにお伝えすることでせめてものお悔やみの言葉としたいと思います。

先生は東大理学部化学のご出身で、東北大金研助教授、京大理学部物理学科教授を経て、1971年阪大基礎工学部物性物理工学科教授に着任されました。センターだより発刊に際しては、京都大学極低温月報が念頭にあったと思われます。手元のセンター便りNo.1（1973）の編集後記には、利用者のみんながのんびりと憩える、そしてはじまれば忽ちホットディスカッションとなるようなサロンにそだてたい—との想いが記されています。

そして1985年4月、センターだよりも先生の退官にあたり、No.50 記念号、題して”夢“を特集。その中で、エライ先生方にはご遠慮いただいて、20歳台の若い人たちまで含めて、低温という窓の向こうの景色に夢を描きたい—という願望に続けて、先生は、わたしなら50年以内に液体窒素温度の超電導、He以外の超流動が見つかるだろうと書く—と記されています。果たせるかな、先生のお言葉を借りれば、ナント！次の年にはHigh Tcの嵐が吹き荒れた！—と1997年のNo.100 記念号”希望“の中で述懐されているのは周知のとおりです

さらに、”夢“の中には、High Tcの出現を予想した人が35人の中に数人はいたのです—と指摘されています。勿論、何の根拠もなかったのですが—とのオチがついてはいますが…。

ただ、センターだよりの寄稿は阪大の人に限るという強いこだわりが一貫してありました。独自のものを育てる、あるいは、阪大オリジナルを貫くというのが先生の意地のようなものでした。この親心、どこまで阪大チルドレンに受け継がれていったのか、今となっては、いささか心もとない気がします。個人的には、空集合はいくらあつめても空集合との指摘は免れないにしても、そして1/35の確率であっても、夢を持ち続ける人が残ってほしいと思っています。

センターだより関連の節目について触れたところで、先生の愛すべきキャラクターに触れておくのも弟子の快い義務と考え、二、三御紹介させていただきます。

まず、世にいう長谷田語録というのがあり、以下に威勢のいいのをいくつか紹介します。

一億、二億がなんだ！—これは京大着任直後に発せられた激として有名です。当時、極貧の研究室で、電子装置の部品もろくに買ってもらえなかった私には超新星出現！にも似た衝撃でした。この一撃に腰を抜かして以後、なぜか、にわかにファンになったひとが多かったのも事実でした。語録は続きます。狙い通りの結果が出てもノーベル賞がとれないとわかっている研究をなぜやるんだ！—これは控えめに自らの研究について答えた助手をはじめ、スタッフの人たちにはショックであり、また反発も買ったであろうと推察されます。しかし、この手の売り言葉に、じゃあ自分はどうなん

だなどと開き直ってお返しするのも大人げない気も。矛先は学生にもおよび、講義と教科書から学んだ金科玉条が、次々と標的となり打ち壊される羽目に。挙句の果て、ドクターコースにくる頃の学生はもうダメやねえーとのため息に変わるのでした。で、ダメな私の対応は、とりあえず嵐の通り過ぎるのを待ち、反撃の機をうかがうというものでした。話をノーベル賞に戻すと、これは後日談ですが、先生は本気で賞をとる気でおられたようだと聞きましたが、如何せん、ストックホルムから届いたのは推薦依頼の手紙だけだったのは私と変わりません。学園紛争当時の、オレは三派だ！—は既成の権威や日常性に対する反発を無邪気に表現されたままで、他意はなかったと思われる。持ち前の反骨、反逆精神は、時に単なる天邪鬼とも受け取れましたが、そばで聞いている分には爽快感すらありました。唯、普段聞きなれない向きには誤解も呼んだかも知れません。一方、もうすこしまとものには、small and individual やcritical consideration— などもありますが、意味するところ、その真髓を正しく解するには時間を要し、いまだにおぼろげな理解にとどまっている状態です。その点、第一流と第一線は違うぞ！—は、だからどうなんだというのはさておき、先生独特の判断が強調されているようで、私も自らの研究について考えさせられる言葉でした。

ノーベル賞を！はやがて、オリジナルを！となり、そして、オモシロイことを！というところまでトーンダウンして来たところで、ようやく私の出番が回って来たというのが実感でした。誰もがやらないことをというのとは一つの見識ではあるが、私の場合、後者を目指した理由は、単に競争相手が少なく、かつ、読むべき先人の論文も少なからうといった次元の低いものでした。それでもせめてオモシロイということで許されるなら私にも何かやることはあるのではないかと期待した次第です。もちろん、何を面白いとみるかでそのひとの器量が問われるわけですが…。先生の御業績を紐解けばそのことがはつきりします。先駆的な低次元磁性体の研究に始まって固体酸素の低温磁気転移、メタ磁性の強磁場磁気転移、包接化合物中金属微粒子の作成とその物性、三角格子磁性体とフラストレーション、磁気ノイズの観測などなど、いずれもきわめてユニークかつ一流、そして素人目にもオモシロイと実感できるお仕事ばかりなのですから。

語録というより口癖というのがありました。創刊号のあとがきにもある、そのうち本屋を—というのがそれで、だれも本気にしなかったのですが、家族の方にも漏らしておられたようなので、やはりその気だったのかも。売れない古本屋の奥でお客相手に辛口の講釈など一席ぶってる名物ジイさんといったイメージしか私には浮かばないのですが、皆さんは如何ですか？

紙数もあることなので、趣向を変えて、以下、先生の持ち前のキャラクターについても私見を少々。

永いお付き合いの中で、私は先生の怒りを買ったことがないと、勝手に思い込んでいます。喜怒哀楽のうち怒と哀が表に出ないので、普段、あまり注意深くは観察してない私には、本当はお湯が沸騰寸前なのにも気づかなかっただけなのかもしれません。いつもにこやかで、胸を張り、しかし、小指の先は緊張のせいかな常にピンと張っておられているのを、私も気づいてはいたのですが…。陰口やボヤキの類も、それを先生が口にされるのは余程の事でした。食べ物に好き嫌いが無いというのもまた不思議で、その感想たるや、常にカタイかヤワラカイかくらいで、失礼ながら先生の味覚を疑うこともしばしばでした。旅のスケジュールや宿泊予定も殆んどあなた、つまり私、任せの無頓着さで、或る時、我々に同行を申し出た人がいましたが、日程のハードさを一目見て即、辞退と

いほどヒドイものでした。先生はというと、当然、一瞥もされず気にもされず、でした。というわけで、長い学会旅行などの道中などではおおむね私の言うがままという気楽さでした。

以上、この稿を終わるに当たり、先生が最後に遺された言葉を振り返りたいと思います。

米寿のお祝いの後も、年に一、二度の割合いで介護ホームに先生をお訪ねしましたが、その都度、先生の記憶が薄れていくのを、なすすべもなく、ただ残念な思いで見守ってきました。ヨオーツ、天谷君か、よく来たねえーに始まり、君はチットも変わらないねえーと続き、チットも変わらないってことはキット馬鹿なんだよーで締まるいつものご挨拶は、先生のご健在の証として、いつも私の心を和ごませてくれるものでした。そのご挨拶もやがてなくなり、私を認識するということも叶わなくなった頃のこと、私はいつものように、先生に物理の話題をお聞かせしていました。その時は宇宙が膨張を続けているといった雑誌ニュートンの受け売りでしたが、話し終わってややあって、それまでずっと静かだった先生が突然、ホンマか！？と一括されたのです。不意をつかれた私が、それまでふんぞり返っていたソファから危うく転げ落ちそうになったのは言うまでもありません。それまでつまらなそうな眼差しで私を眺めながら、終始無言だったんですから…。その一言が、私が直接耳にした先生の最後のお言葉となりました。今からちょうど2年前のことでした。亡くなられる1年前にもお伺いしましたが、この時も終始無言でした。係りの方にお伺いすると、ナント！御機嫌のいい時は先生、お歌を歌われるんですよーときた。ウソでしょう、ねえ先生、とばかりお歌をせがむのであるが、完全無視。ところで何の歌ですか？と再び問いかける私に、係りの方の答えは、なんと！メダカの学校ーでした。ソーカ、先生の記憶の中では僕らはいつまでたっても一人歩きの出来ない生徒だったのかも。

いよいよ最後に、これは今は亡き先生に。

先生、さようなら。でもきっと近いうちに、どこか遠い空の向こうでお会いできると信じています。

その時の先生の言葉、わかってますよっ。ですから今度は私にお先に言わせてください。

先生、チットもお変わりになりませんねえ！

これ、女房が言うには、最高の褒め言葉なんだそうです。

もう一度。長谷田先生、さようなら。

追記

ややemotionalにすぎた追悼文なのは、センターだよりのポリシーである気楽さに免じてお許し願いたい。

2016年12月

天谷 喜一

